



# 教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,  
Città del Vaticanoの転載許可済  
© 1991  
発行所  
財団法人 精道教育促進協会  
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6  
☎(0797)31-3452

## 聖母の被昇天

1 「全能者が私に偉大なことをされたからです。(ルカ1・49)

キリスト信者の共同体は日々「マニフィカト」(マリアの賛歌)をマリアとともに唱えますが、今日は特別の祭りにふさわしい唱え方をします。私たちはマリアと一緒に、お告げのあとでエリザベトを訪問したザカリヤの家ではなく、聖母被昇天の入りに近づきます。「マリアは天に上げられた。天使の群れは喜び輝く。」(聖母被昇天のアレルヤ唱)

ロザリオの栄えの玄義・第四玄義、聖母の被昇天。聖母の被昇天は全人類の中から特別に選ばれた方に示された神の秘義です。

2 今日、教会は、神の人類との契約を特別に思い出させる敵

肅な秘義だけでなく、神の母であるマリアの秘義にも思いをはせます。

教会は、処女マリアの母性を見つめ、そのまれな美しさを讃えます。天分に恵まれた多くの人は、幾世紀にもわたって、光り輝く処女が聖霊によって母となったことに魅惑されました。どんなに多くの画家や彫刻家、作家、詩人、音楽家が、マリアの美しさが人類の歴史の中でさらに輝くよう、その才能を駆使してきたことでしょう。また、思想家や神学者たちは「恩寵に満ちあふれ」天に上げられた「マリアについて、より一層理解を深めるために努力してきたこと」でしょう。

3 人間の表現には限界があるよ

うです。神の母の美しさは外面的なものというより、むしろ内から出るものなのです。詩篇は今日の典礼でマリアの威厳ある上品な魅力を讃えています。あ

娘よ、聞け。見よ、耳を傾けよ、あ

なたの民と父の家を忘れよ。王はあなたの美しさに魅せられた。(45・11)

「12」と言う時、その美しさの神秘的な源を示してはいないでしょうか。確かにその美しさは神御自身からのもので、同時にそれは私たちの世界に属する美しさでもありません。事実、マリアの美しさは完全に人となりたもうた御子からのものなのです。私たちはマリアの人間のすばらしさをベトレヘムの馬小屋、残酷なヘロデ王の策略から御子を守るためのエジプトへの逃避行に眺めます。その美しさを、ナザレトでの生活、ガリラヤのカナにおける出来事にも見ます。しかし、マリアの美しさが特に輝きを見せるのは、「聖母が神の御旨に一致して、釘付けにされた贖い主の十字架の下に立っておられる時である」と、第二バチカン公会議は教えています。(「教会憲章」58)

4 教会が特に今日、荘厳に宣言

するのはこれです。黙示録の女性「太陽に包まれた女性」は「壮

大なしるし」でした。(12・1参照)ヨハネの幻視では、天に現れた印ですが、実は私たちのためののです。「壮大なしるし」は人類の歴史を支配し、挑戦を突き付けます。これに對抗して、「他のしるし」赤い竜があり地上に害を与えようと狙っているだけでなく、創世記でも告げられているように特に婦人とその子を攻撃します。

5 マリアが天に上げられたことは真に確実なるしです。そ

れゆえ被昇天の荘厳な典礼は、人類が地上で善と悪、恩寵と罪との間に置かれていたことを思い起させます。光と恩寵の勝利は、戦いの結果です。これが人生に起ること、一人ひとりに起ること、歴史に記されている諸国、諸民族に起ることなのです。

(新しい点を捜しましょう。その一つは一九八九年に中央および東ヨーロッパで起ったことです。第三章はこの問題に費やされています。もう一つは、今日もとても大切なこととして、土地や生産手段よりも、知識と技術の分配が要求されているという主張です。さらに) 社会問題に対する教会の貢献は、人々の心の中で実現することである(という点でしょう。回勅は『レールム・ノヴァールム』を振り返り、そして今日私

れは完全に成就した天の国を示し、神の永遠性へと導きます。この道でいつでもマリアに会えるのです。むしろマリア御自身の方から私たちのもとへ来てくださるのです。ちょうどマリアがザカリヤの家へエリザベトを訪問されたように。私たちは身近にマリアがいてくださるという心の支えもっているのです、時には困難な日々の生活もマリアと共に過ごすことができるのです。「主の御母が私を訪問してくださいました。あなたはその女の中で祝福された方です。(ルカ1・43、42)」「主が卑しいはしのために御目をとめられたからです。これからのち、代々の人々は私を幸いな女と呼ぶこととしましょう。全能者が私に偉大なことをされたからです。その名は清く。(同1・48・49) (8・15)

### 回勅

## 『チエンテジムス・アヌヌス』

ちを取り巻く「新しいこと」に目を向け、さらに、もうすぐ始まる三千年目を展望しています。以下、回勅を引用しながら、概略を示します。『レールム・ノヴァールム』再読

教会は、レオ13世の時代とは全く異なる現代の挑戦を受けて立ちます。その精神は同じです。先任者は当時の希望と期待に応えるため神の霊に従いましたが、同様に教会も神の霊に従います。私も今という時代

の希望と期待に応えるため同じようにしたいと望んでいます(5月1日、教皇が回勅を紹介されたときの話)。(『チェンテジマス・アンヌス』の第一章は『レールム・ノヴァールム』だけでなく、今回の回勅を読むための鍵になります)『レールム・ノヴァールム』が対処せんとする諸悪の源は、経済社会活動が、人間に関する真理から離れた事にあります。(4)

一九八九年

当時の社会主義は、社会哲学の段階でした。(2)(ところで)レオ13世教皇は、社会主義の根本的な誤謬が人間観にあると見抜きました。(3)ヨーロッパの共産主義崩壊の原因の一つは非効率な経済体制ですが、それを単なる技術的な問題と考えるべきではありません。むしろ、経済分野でのイニシアティブと所有権、自由の面で人間の権利を侵した結果なのです。(24)

大勢の労働者がイデオロギーと全体主義を倒したのは、大抵の場合、平和的な戦いによってでした。(…)これは、道徳的な理由では譲る意志が全くないと決めていた人々に対し、話し合いと福音の精神に則った戦いを願う心の勝利です。(それはまた)政治的現実主義の名の下に政治の世界から法律と道徳を排除せんとする人々に対する警告でもあります。(2) (しかし)共産主義崩壊の最大の原因は、無神論によって引き起された精神的空白(空虚)です。(…)

以外にはそれが不可能であることを示しただけでした。(24) (第三章では一九八九年を振り返り、今特に必要な援助について話されます)。(しかしその援助が)もつとひどい欠乏と貧困に苦しんでいる第三世界への支援努力を減少させることになってはなりません。(25)

消費主義

(第四章で教皇は私有財産制が正当であることを再確認されますが、同時に所有権は絶対的なものではない点を強調しておられます)。(神は創造の御業を実現なさるにあたり、全ての人が生きるために地球を人類にお与えになりました。)(31)

(次いで教皇は第一世界の現状を考察し、連帯の不足、ポルノ、家庭の崩壊など、消費主義的な物質主義とその様々な表れについて話されます)。(それは市場経済の結果ではなく、誤れる人間観の結果です。(しかし)経済組織に対するというよりも、むしろ倫理・文化的な体系に対して向けられています。(39)

消費社会の失敗は価値の転倒の結果です。より良い生活を望むのは悪いことではありません。間違っているのは、より良いと考える生活様式が(…)「存在」のためにさらに多くを所有するというよりも、快樂そのものを目的として生きることを目指しているからです。(39)

国家の役割

全体主義に反対する教会は、民主主義を評価します。(…)しかし、本

物の民主主義とは、法治国家において、人間のペルソナ(人格)についての正しい考え方を基礎にして初めて実現するものです。(46)(次いで連帯性に触れ)上位に立つ社会構造は、下位に立つ小さな社会グループ自身の権限を剝奪し、そのグループ内の生活に干渉すべきではありません。そうではなくて、むしろ困ったときに助け、彼らが社会の他の構成要素と連帯できるように常に共通善を考えながら助けなければなりません。(48)

(国家の行き過ぎた介入、いわゆる福祉国家についても触れ)。(これは、人間の活力を失わせるだけでなく、利用者に仕えて役立つというよりも官僚的に支配されることが多いので、公的な組織をいたずらに増大し、果ては膨大な出費を余儀なくされます。(48) (より効果的なのは、きめの細かいイニシアティブです)。(困難を身近に感じている人や困った人の側にいる人の方が、困難を一層良く理解し、もっと適切な助けの手を差し伸べることができるようです。(48)

教会において愛徳が消えたことはなく、現在は益々多様化し、増加していることは大きな慰めです。(教皇は特にボランティア活動に触れておられます)。(49)

実行に移す

(最後の第七章では『人間の贖い』の「人間は教会の道である」という表現を取り上げてこう言われます)。(教会の社会教説はそれ自身が福音宣教の道具です。それは神、そしてキリストにおける救いの秘義を全てのの人に告げ知らせ、また同じ理

由で、人間に人間を啓示します。(44) (最後に)社会教説そのものの一貫性や論理性よりも、それを行いで証明してこそ信頼を得ることができるといふことを教会はしっかり自覚しています。(47)(そして、この証人となるのは経済、政治、社会の各分野で働く信者なのです)。(以下抄訳)

市場の効能と限度

(…)近代(企業)経済にはポジティブな面がありますが、その根本は人格(ペルソナ)の自由であり、それは他の分野と同じく経済の分野で行使されます。事実、経済は多様な人間活動の一つです。そして他の分野と同じくこの分野でも、自由とその自由を責任をもって行使する権利は有効であると認められます。(32)

(…)国内間、国際間とを問わず、自由市場こそ資源を配置し、効果的に必要に対処するために有効であると思われまふ。しかし、こう言えるのは、購買能力と支払能力があつて手に入れる必需品と適切な価格で販売できる資源に関してだけです。ところが、この他にも人間には必要でありながら、市場に回らないものが沢山あります。人間の基本的な必要が満たされないと、その圧迫に押しつぶされると言うことが起らぬようにするのは、正義と真理の重大な義務です。(…)公正な商品取引の理論とそれに適した公正な取引方法に先立って、人間の尊厳ゆえに当然人間に帰すべきものがあるのです。この当然人間に帰すべきものの中には、生きる可能性と人類の共通善の

ために活動的に働く可能性が分かち得ない形で含まれています。(44) (…)ここに市場のもう一つの限界があります。すなわち集約的かつ質的な必要の中には、市場経済の機構(メカニズム)によっては満たされないものがあるといふことです。人間には市場論理で把握できない重要な必要があります。またその性質上、売買ができないものや、売買すべきでないものがあるのです。確かに、市場のメカニズムには利点があります。資源をより有効に活用するのに役立ち、製品の交易を進め、特に人の意志と好みを優先させます。(…)しかし、それには市場「崇拜」の危険が付きまといまふ。そうなるとその本質から言って単なる商品ではなく、また商品ではあり得ないものの存在を無視してしまひまふ。(40)

共産主義が失敗した今となれば勝者は資本主義である、と言えるでしょうか。(…)資本主義は、経済と社会を再建するために努力を傾ける国の目標となり得るのでしょうか。本当の経済的社会的進歩を模索する第三世界にとって、資本主義はモデルになるのでしょうか。答えは簡単ではありません。企業と市場と私有財産の基本的積極的な役割、それに伴う生産手段や経済の分野での自由なイニシアティブに対する責任の役割を認める経済体制を資本主義というなら、答えは「イエス」になります。この場合、資本主義と呼ぶよりも企業経済、市場経済、あるいは単に自由経済と呼ぶのが適切でしょう。しかし、経済分野での自由が堅固な法的枠に組み入れられ

〈新刊のお知らせ〉

「教」(きたえる)

ホセマリア・エスクリバー著

新田壯一郎訳

定価一六〇〇円 一三〇〇円

付中》

「神の現存」カセット・テープのお知らせ  
 前回好評をいただいた「祈り方」に続き、霊的読書のためのカセット・テープ第二巻として、『祈りと神

# 説教・講話・書簡等の抄訳

「道」、「拓」に続くオプス・デイ創立者による黙想の書。キリスト者の生活を真剣に生きんと願う全ての人のために。

ていない場合、つまり資本主義が全体的な意味での人間の自由を役立たず、倫理宗教的な面を核とする自由の一面として考えられないものであるなら、当然答えは「ノー」です。(42)

## 消費主義

豊かな社会あるいは消費社会は、(…)マルクス主義を全く物質的なレ

ベルで打倒しようとして、自由市場が共産主義の確約よりもいかに完全な人々の物質的必要を満足させられるかを示します。しかし、精神的価値を除外しています。確かにこの社会的モデルは、マルクス主義が新しくより良い社会の建設に失敗したことを示します。しかし、自律的な生き方とその倫理道徳、権利と法律、文化と宗教の価値を否定するので、

人間を完全に経済的欲求と物質的必要を満たすことに押し込めてしまい、この点でマルクス主義とは何ら変わるところのないものになってしまっています。(49)

これらは経済組織に対するというよりも、倫理文化的な側面に対する批判です。事実、経済は複雑な人間活動の一面(…)にすぎません。万一、経済活動が絶対視され、物の生

産と消費が、社会生活の他の価値とは無関係な中心、そして社会の唯一の価値となることがあるとすれば、その原因は経済組織そのものではなく、倫理宗教的な面を無視したために社会・文化体系が弱まり、物の生産とサービスの提供しかできなくなったことが原因でしょう。(39)

知性を有し、自由な存在である人間の現実を様々な仕方で見失し、人

間の本能だけを直接相手にするならば、客観的道義に反し、往々にして身体的精神的健康にも害を及ぼす消費や生活様式(ライフスタイル)を身につけてしまっています。経済組織そのものには、(…)成熟した人格の形成の邪魔になるか否かを正しく判断する基準が備わっていませんから、どうしてもこの面における教育と文化の働きが緊急に必要なのです。(66)

# 聖霊と秘跡

## 「聖霊」シリーズ ③

1 一・聖・公・使徒継承の教会の真理の源であり、生命の与え主なる聖霊は、秘跡生活の源でもあります。その秘跡を通して、教会はキリストの御力を受け、その聖性に与り、その恩寵に養われ成長し、永遠に向かう旅路を歩みます。みことばが人となられた時に働かれた聖霊は、キリストが制定され、教会内で行なわれる全ての秘跡においても働いておられます。キリストが人々に「新しい命」を与え、救いの業の協力者として教会を御自分に結び合わされたのも、秘跡を通してなのです。

2 今日秘跡の本質、特性、範囲については説明しません。できれば他の機会に扱いたしましょう。「秘跡は我々の救いのためにキリストが制定してくださった恩寵の手段である」という昔のカトリック要理の簡潔な文句(公式)を思い出さることができません。また、聖霊は創造

者であり、執行者、キリストの恩寵の息吹であると復唱することもできるでしょう。そこで今回は、福音書にそって、一つひとつの秘跡と聖霊とのつながりについて考えようと思

罪のゆるしを受けるために、イエズス・キリストのみ名によって洗礼を受けなさい。そうすれば、聖霊の賜を受けるでしょう(使行2・38)というペトロの勧めを聞いたと記されています。また、パウロは手紙で、救い主イエズス・キリストの注がれた「聖霊による一新と再生の洗い」について話し(テイト3・5と6参照)、洗礼を受けた者には「主イエズス・キリストのみ名により、私たちが神の霊によって自分を洗い、そして聖とされ、そして義とされ」ること(コリント①6・11)、また「一つの体となるために一つの霊によってみな洗礼を受け、そして一つの霊を注がれた」(同12・13)ことを思い出さよう勧めしています。福音書と同様パウロの教えでも、洗礼を宣言し、授与し、聖化と救いの源、つまりイエズスがニコデモに語られた新しい命の源としての洗礼について述べるにあたり、聖霊とイエズス・キリストのみ名が関連づけられています。

3 このつながりが明白なのは、ニコデモとの会話の中で、イエズスは洗礼を「水と霊によって」生まれることと表現しておられます。「肉から生まれた人は肉で、霊から生まれた人は霊である。上から生まれねばならぬ」(ヨハネ3・5と7)

すでに洗礼者ヨハネはキリストのことを「聖霊で洗礼を受ける者」(ヨハネ1・33)、「聖霊と火によって洗礼を授けられる」方(マテオ3・11)であると宣言していますし、使徒行録や使徒たちの手紙にも様々な表現で記されています。聖霊降臨の日、人々は「悔い改めなさい。おのおの

人間を完全に経済的欲求と物質的必要を満たすことに押し込めてしまい、この点でマルクス主義とは何ら変わるところのないものになってしまっています。(49)

これらは経済組織に対するというよりも、倫理文化的な側面に対する批判です。事実、経済は複雑な人間活動の一面(…)にすぎません。万一、経済活動が絶対視され、物の生

産と消費が、社会生活の他の価値とは無関係な中心、そして社会の唯一の価値となることがあるとすれば、その原因は経済組織そのものではなく、倫理宗教的な面を無視したために社会・文化体系が弱まり、物の生産とサービスの提供しかできなくなったことが原因でしょう。(39)

知性を有し、自由な存在である人間の現実を様々な仕方で見失し、人

間の本能だけを直接相手にするならば、客観的道義に反し、往々にして身体的精神的健康にも害を及ぼす消費や生活様式(ライフスタイル)を身につけてしまっています。経済組織そのものには、(…)成熟した人格の形成の邪魔になるか否かを正しく判断する基準が備わっていませんから、どうしてもこの面における教育と文化の働きが緊急に必要なのです。(66)

4 使徒行録には、按手によって使徒たちが聖霊の賜を与えたと記されている通り、洗礼に続いて行なわれる堅信は、按手の形で授け

られると記されています。ペトロとヨハネが洗礼を受けたばかりの人に「按手すると聖霊が下った」(使行8・17)のです。使徒パウロの場合にも新たに洗礼を受けた者に同じ事が起りました。「パウロが按手すると聖霊は彼らの上に下った」(同19・6)

信仰と秘跡を通して、私たちは、「主において約束の聖霊のしるしを受け、聖霊は私たちの世継の資金」(エフェソ1・13と14)となります。パウロはコリント人に宛てて「あなたたちとともに私たちにキリストにおいて固め、私たちに油を注がれたのは神である。神は私たちの心に判を押し、私たちの心に霊の資金をえられた」(コリント②1・21、22、ヨハネ①2・20、27、3・24参照)と書き送り、私たちに「あがないの日のためにしるしを」(エフェソ4・30)与えられたその聖霊を悲しませないようにとエフェソ人に忠告を送っています。

このように使徒行録を読めば、堅信の秘跡が「主イエズスのみ名によって」洗礼を受けた後、按手によって授けられることがわかります。(使行8・15と17、19・5と6参照)

5 赦し(告解・悔後)の秘跡と聖霊のつながりは、復活後のキリストの言葉によって確立されました。それはヨハネが証明している通りです。イエズスは使徒たちに息を吹きかけて「聖霊を受けよ。あなたたちが罪をゆるす人にはその罪がゆるされ、あなたたちが罪をゆるさぬ人はゆるされない」(ヨハネ20・22と23)と言われたのです。この言葉は、病者の塗油の秘跡に当てはめることができます。ヤコボの手紙は次のように記しています。長老たちが「主のみ名によって」油を塗ってかから唱える「信仰による祈りは、病気の人を救う。主は彼を立てせ、もし罪を犯しているならそれを赦されるであろう」(ヤコボ5・14と15)と。キリスト教の聖伝によると、この塗油と祈りが秘跡の原型だと考えられてきました。(聖トマス・アクイナス『異教大全』IV、C73参照)トレントの公会議もこれを認めています。「カトリック教会公文書資料集」1695参照)

《ご子続》  
★★★★★  
ました。税込み定価1巻二二〇〇円、送料三〇〇円です。ご希望の方は左記までお申し込み下さい。  
659 芦屋市船戸町12-6 精道教育促進協会

# 不変の教え

ています。そこでは、イエズスがカ  
 フアルナウムの衆議所で御体と御血  
 の秘跡の制定について話された時の  
 様子が詳しく記されています。「生  
 かすのは霊で、肉は何の役にも立た  
 ぬ。私の言ったことは霊であり命  
 である。」(ヨハネ6・63) みことば  
 にも秘跡にも聖霊から受けた生命と  
 効力が備わっているのです。

聖伝も聖体と聖霊のつながりを伝  
 えています。それはミサの中でずっ  
 と唱えられているとおりで、奉献  
 文の祈りの中で教会は、祭壇の上に  
 捧げる供え物を「聖霊によって」(第  
 三奉献文)とうといものにしてくだ  
 さい、「この聖霊によって」(第二奉献  
 文)、「いまとうとい供えものを受け  
 入れ、祝福してください」(第一奉献  
 文)と祈ります。教会は、聖変化の  
 実現、パンとぶどう酒がキリストの  
 御体と御血に秘跡のうちに变化する  
 こと、この共同体に属する全ての人  
 に恩寵が与えられることにおいて働  
 かれる聖霊の驚くべき御力を強調し  
 ます。

**7** 次に叙階の秘跡ですが、パウ  
 ロは按手によって受ける「カ  
 リスマ」(聖霊の賜)について語って  
 います。(ティモテオ①4・14、②1・  
 6参照) そして司教を「定め」る  
 のは聖霊にほかならないと言ってい  
 ます。(使行20・28参照) その他の  
 パウロの手紙や使徒行録でも、聖霊  
 とキリストの聖務者(役務者)つま  
 り使徒たちとその協力者とさらにそ  
 の後継者(司教、司祭、助祭)は、  
 使命を受け継ぐだけでなく(次回の  
 テーマ)、カリスマを受け継ぐという  
 特別な関係にあることが証言されて

**8** 最後に、婚姻の秘跡、パウロ  
 が「この偉大な奥義(…)私が  
 そう言うのはキリストと教会につい  
 てである(エフェソ5・32)という  
 秘跡について考えましょう。この秘  
 跡によって、キリストの御名のうち  
 に、キリストを通して、命と愛の共

「贖い主の御母、天の門、海  
 の星よ、再び立ち上がるこ  
 を望むあなたの民をお助けください」  
 コバ・ダ・イリアであったの足元に  
 集う私たちは、キリストと教会の母  
 であるあなたに向かつて、  
 この困難な時代に教会と私  
 たち一人ひとり、人類全体  
 のためにしてください。このこ  
 とに感謝をささげます。

「母であることをお  
 示してください。私た  
 ちは本当に何度もあなたに  
 助けを求めました。今日、  
 私たちは、いつも願いに耳  
 を傾けてくださったことを  
 感謝するためここに集って  
 います。あなたは母である  
 ことを示してくださいいまし  
 た。キリスト教三千年目に  
 向かってこの地上で歩みを  
 続ける宣教師・教会の御母。  
 絶え間ない御保護によって  
 私たちを災害と取り返し  
 のつかぬ破壊から守り、近代  
 の社会的勝利と発展を可能にして  
 くださった全人類の御母。思いもよ  
 らぬ変化をもたらして、永らく虐げら  
 れ屈辱を受けてきた諸国民に自信を  
 取り戻してくださった御母。数多く

## 神の御母への奉献 (ファチマにて)

同体となる男女二人の間で誓約が成  
 立します。この秘跡において「聖霊  
 によって、この心に注がれた」(ロー  
 マ5・5)神の愛に、人間が参加する  
 のです。聖アウグスティヌスによれ  
 ば、神において御父と御子と「一致」  
 (三位一体 VI.5.7, PL42.928)  
 である聖三位一体の第三のペルソナ

の印を与えて、悪と死の権力から守  
 ってください(…)生命の御母(…)よ、  
 あなたは常に母でありましたが、特  
 に一九八一年五月十三日、私は助け  
 の手を差し伸べるあなたの現存を感  
 じました。(…)キリスト  
 の御血で贖われた人類の御  
 母、完全な愛と希望と平安  
 の御母、贖い主の聖なる御  
 母。

「母であることをお  
 示してください。そう  
 です。世界はあなたを必要  
 としています。続けて母で  
 あることをお示してください。  
 国々と教会の新たな状態は  
 変わりやすく不安定です。他  
 の型の無神論がマルクス主  
 義に取って代る危険があり  
 ます。それは自由を賛美す  
 るが、自然道徳とキリスト  
 教道徳を破壊しがちです。  
 希望の御母よ、私たちと共  
 に歩んでください。20世紀  
 最後の敵を、人々と共に、

は、婚姻の秘跡を通して、男と女の  
 人間(ペルソナ)としての「一致(交  
 わり)」を形作られるということ。  
**9** このように、教会の秘跡生活  
 において聖霊が現存し、働か  
 れるということ、聖霊と聖伝、特  
 に秘跡の典礼に基づいて簡単に見ま  
 したが、このすばらしい教理をさら

ください。最近、自由の可能性を獲  
 得し、未来の建設に専念する国々は  
 あなたを必要としています。(…)  
 今も世界を脅している多くの激しい  
 衝突を解決するため、世界はあなた  
 を必要としています。

「母であることをお示しく  
 ださい。貧しい人々や飢餓と  
 病で死にかけている人々、拷問と権  
 力の濫用に苦しめられている人々や  
 仕事や住居や拠り所の見付からない  
 人々、圧迫され搾取されている人々  
 や希望のない人々、心の平安を求め  
 ても神から離れているゆえ見出すこ  
 とのできぬ人々の母であることをお  
 示してください。神的生命の写しであ  
 る命を擁護する私たちをお助けくだ  
 さい。生命の始めから自然の死に至  
 る迄の生命を常に守ることができ  
 ようお助けください。一致と平和の  
 母であることをお示してください。(…)  
 暴力と不正を止めさせてください。  
 家庭内での調和と一致、国家間での  
 尊敬と相互理解が増すようお助けく  
 ださい。平和、ほんものの平和が地  
 上を支配しますように。マリアよ、  
 私たちの平和であるキリストを世界  
 にお与えください。国々が再び憎悪  
 と復讐の溝を掘ることのないよう、  
 また人格の尊厳を犯し、(…)資源を

に深めるために、秘跡にたびたび与  
 るように勧めたいのです。それは、  
 聖霊に従順で、忠実であることの表  
 れです。教会が「イエズス・キリス  
 トによって制定された救いの手段」  
 を通して、全世界の贖いのために働  
 くことを実現させてくださるのには聖  
 霊にほかならないのです。(1・31)

危険に晒す、偽りの安寧という欲求  
 に屈しませんように。希望の母であ  
 ることをお示してください。前途を見  
 守ってください。今も戦争の恐れに  
 脅える人々や国々を見守ってください。  
 諸国の指導者と人類の運命を左  
 右する力を有する人々を見守って  
 ください。常にこの世の精神に脅かさ  
 れている教会を見守ってください。  
 教会の福音宣活動の新たな目標に  
 向けて、福音と人々に仕えようと望  
 むペトロの職務を見守ってください。  
 すべてはあなたのものです。

牧者たちとの一致のもと、地  
 上のあらゆるところに散在す  
 る神の民と心をひとつにして、本日、  
 私は信頼しきって人類全体の奉獻を  
 更新いたします。(…) あなたと共  
 に人類の贖い主キリストに付き従い  
 たいのです。疲労が重荷とならぬよ  
 う、困難な課題を前にして歩みが滞  
 らぬよう、困難が勇気を、悲しみが  
 心の喜びを取り去ることのありませ  
 ぬように。これからも贖い主の御母  
 が全ての人々の母であることを示し、  
 私たちの歩む道を見守ってください  
 ますように。天国で喜びのうちに御  
 子に会うことができますように。ア  
 ーメン。  
 (神の御母への奉獻、91・5・13)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしに  
 そのまま伝える月刊紙 ■毎月 十日発行 ■定価 一部八十円 送料実費  
 ■一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要  
 郵便振替 3-72393